

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### ヨハンナ・シュペーリ作『ハイジ』の研究(I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1995-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/752">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/752</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# ヨハンナ・シュピーリ作

## 『ハイジ』の研究（I）

山 田 はるつ

### 1. 今なぜハイジなのか

『ハイジ』の第1部が刊行されたのは1880年、つまり今から約110年以上前である。この作品は最初スイスで出版されたのではなく、ドイツのゴータ (Gotha) のペルテス出版社 (Perthes Verlag) からイラストなしで出版された。そして第3版になって初めて、ヴィルヘルム・プファイファー (Wilhelm Pfeifer) の3枚の木版画が付けられ、のちにヴィルヘルム・クラウディウス (Wilhelm Claudius) のカラーの表紙が、さらにその後になってから同じクラウディウスの白黒の挿し絵が添えられた。今日までに出版された部数は、手を加えられたものや、短縮した版を計算に入れなくとも、何百万部かわからないほどである。この作品は、世界の多くの言語に翻訳され、アメリカでは、ボストンの盲人図書館にブライユ点字で印刷された本が収められている。

『ハイジ』は何度か映画化もされた。最初の映画はアメリカで、1937年、天才子役シャーリー・テンプルを主演に、メトロ・ゴールドウィンによって製作された。そののち、1952年にスイスで、1965年にはドイツで映画化され、シナリオが1966年に出版されている。また、オペラのテーマにもなった。

1966年には、チューリヒのフランツ・カスパー (Franz Kasper) によってヨハンナ・シュピーリ協会 (Johanna Spyri Stiftung) が設立された。そこには世界中のハイジの訳本が収集されている他、ヨハンナ・シュピーリの生涯と作品についての文書資料が保管されている。ハイジのふるさとマイエンフェルト (Maienfeld) には、1953年にハイジの泉 (Heidi-Brunnen) と名づけられる記念碑が建てられた。これを建てるのについては、ザンクト・ガレン大学のテューラー教授 (G. Thürer) が骨を折ったのだが、除幕式の時の挨拶の中で彼はこう言っている。

「……世界各国から代表的な人物を四人ずつ出して、かるたを作るとしたら、スイスからの四人は、建国の勇者ヴィルヘルム・テルと、教育の父ペスタロッチと、赤十字の創始者アンリ・デュナンと、ハイジになるだろう……」<sup>1)</sup> ハイジはスイスを代表する人物の1人なのだ。また、イレーネ・ディーレンフルトは『ドイツの児童書の歴史』の中で次のように述べている。

「……『ハイジ』は、ヨハンナ・シュピーリの世界的大成功となった。ヨーロッパの国々だけが自国語に翻訳したのではなく、アメリカや日本にも渡り、到るところで子供の心に、モミの木がざわめくアルムの小屋や、山々や、山羊たちや、アルムおじさんや、ホームシックにかかったハイジの像を刻み込んだ。『ハイジ』の部数がどれくらい印刷され、読まれたかを誰も数えることは出来ないであろう。それが何百万部もあることは確かであって、シュピーリの他の作品が消えたり、忘れられたりしても、『ハイジ』だけは依然としてその価値が認められつづけるであろう。」<sup>2)</sup>

日本では、野上彌生子が1920年に訳した『アルプスの山の娘』<sup>3)</sup>が最初の訳本である。高橋健二も、「シュピーリが最初の小説を刊行したのは、一八七一年、彼女が四十四歳の時です。中年を越えてから、文筆にたずさわったわけです。しかも、その処女作も、出世作『ハイジ』も最初は匿名で出したくらいで、作家として売りこもうというような野心はなかったのです。が、『子どもと子どもを愛する人たちのための物語』は多くの人に愛読され続けています。とりわけ、『ハイジ』は世界中でどれくらい読まれているか、測りしれないくらいです。日本でも『ハイジ』の翻訳は、三十とおりにあります<sup>4)</sup>。永遠のベストセラーズに数えられることはまちがいありません。」<sup>5)</sup>と述べており、事実、日本でも今だに読まれつづき、新しい訳本が出版されつづけている。最も新しい版は1993年3月の『ハイジ』<sup>6)</sup>である。野上の訳本から約70年、この間に100種から150種近くの翻訳が刊行されたと推定される。残念ながらこの中で完訳はきわめて少なくほとんどが短縮版であるが、そのために幼い子供にも理解でき、(実はそれが狙いなのだが)、対象年齢が幅広くなる結果を生んだ。

訳本ばかりではない。1974年にはアニメ化<sup>7)</sup>されテレビにまで登場したのである。そして、しばらくのちにその形のまま映画化され、現在ではビデオ、レーザーディスクになって発売されている上に、ドイツに逆輸出されさえした。その他にも別の著者による続編の翻訳<sup>8)</sup>やダイジェスト、紙芝居<sup>9)</sup>、ビデオ絵本<sup>10)</sup>、教科書版<sup>11)</sup>、まんが本<sup>12)</sup>などの形で出版されている。

この作品がドイツ文学史に取り上げられることはないが、児童文学史上ではむしろ重要視されている。しかし、昔から批判の声もある。ハインリヒ・ヴォルガストが『わが国児童文学の悲惨』<sup>13)</sup>の中でこの作品を批判したのを初めとして、一部の批評家がこの作品に現れる、すべてを神の摂理に還元してしまう濃厚な宗教色、アルプスの自然を善、都会を悪と割り切る一面的な考え方を批判の対象にしている。しかし、そういう批判はあるものの、ハイジに触れている解説のたぐいは、ほとんどが賛美ばかりで、この作品を正面から取り上げて論じているのは、クラウス・ドーデラー(1925-)の「ヨハンナ・シュピーリの『ハイジ』—理想化された現実における疑わしい美德の世界」<sup>14)</sup>だけである。

このようにハイジの名はすっかり有名になり、あるいは原作者以上によく知られているかもしれない。平成5年8月には「永遠の名作・アルプスの少女ハイジ展」と称する展覧会も開かれた。パン屋では「ハイジの白パン」なるものを見かけるし、玩具屋にはハイジのジグソー・パズルもあった。旅行社のパンフレットの中には、「アルプス2大特急とハイジを訪ねる10日

間」という旅行プランが見つかった。テレビのスイスを訪ねる番組では「ハイジを訪ねる旅」という企画が組み込まれ、ドラマでは「アルプスの少女ハイジみたい。」というセリフが今なお使われていた。あるいは、都会の公害が云々される今日、その対極とされるアルプスの自然に、ますます人気が出てきたのかもしれないが、児童文学の名作として、刊行後110年以上たった今なおハイジの人気は衰えを知らない。しかし、これほど愛されながら、これほどに形を変えられ、短縮されることが多いのは何故だろうか。なぜこんなにも人気があるのだろうか。そして、児童文学の古典として著名であるにもかかわらず、まともな論議が少なすぎはしないか。それなりの研究があつてしかるべきであるし、くわしく内容に立ち入って論究を試みる必要があるのではないだろうか。論者にとって、むろん根本は『ハイジ』が愛読書だからだが、こういう状況を見て、ハイジの全体像を自分なりにつかんでみたいということから出発して、本論文では、『ハイジ』という作品の魅力をも欠点をも総合的に取り上げたいと思う。

### 【注】

- 1) 高橋健二 『シュペーリの生涯』 (1972年 彌生書房) S.21-22.
- 2) Irene Dyhrenfurth, Geschichte des deutschen Jugendbuchs,  
Zürich und Freiburg i. Br. 1967, S.270.
- 3) 野上彌生子訳 『アルプスの山の娘』 (1920年 岩波書店)
- 4) この本が書かれた頃の数である。
- 5) 前掲1) S.14-15.
- 6) 武鹿悦子訳 『ハイジ』 (1993年3月 チャイルド社)
- 7) 演出—高畑勲, 脚本—佐々木守, 場面構成・画面構成—宮崎駿.
- 8) シャルル・トリッテン作 各務三郎訳  
『それからのハイジ』・『ハイジのこどもたち』 (1980年 読売新聞社)  
フレッド・ブローガー, マーク・ブローガー作 堀内静子訳  
『ハイジの青春アルプスを越えて』 (1990年 ハヤカワ書房)
- 9) 神戸淳吉脚色／解説, 森やすじ／千葉みどり画 『アルプスのしょうじょ』  
前編・後編 (1991年 教育画劇)
- 10) ビデオ絵本14 『アルプスの少女ハイジ』 (1988年 ウォーカーズカンパニー)
- 11) 成瀬武史訳注 『アルプスの少女ハイジ』 (1984年 日本英語教育協会)  
福沢レベッカ著・田辺洋一監修 『英語できく世界の名作4・アルプスの少女ハイジ』  
(1990年 日本放送出版協会)
- 藤田五郎監修・下山峯子訳注 『ハイジ』 (1969年 評論社)
- 杉浦実・福元圭太編 『ハイジ』 (1992年 第三書房)
- 12) 藤田素子作画 『ハイジ』 (1983年 サンマーク出版)  
わたなべまさこ画 『ハイジ』 (1968年 小学館)

- 13) Heinrich Wolgast, *Das Elend unserer Jugendliteratur*, 1896.
- 14) Klaus Doderer, Johanna Spyris "Heidi"-Fragwürdige Tugendwelt in verklärter Wirklichkeit, in *〈Klassische Kinder- und Jugendbücher〉*, Weinheim und Basel 3.Aufl. 1975.

## 2. 教養小説の問題

現在では『ハイジ』は、第1部と第2部が1冊にまとめられて、ドイツその他のヨーロッパの国々ではほとんどが "Heidi", 日本ではほとんどが『アルプスの少女』, あるいは『アルプスの少女ハイジ』という題名で刊行されている。しかし、もともとは、今の刊本の前半、第1部とされる第14章「日曜日に鐘が鳴る」(Am Sonntag, wenn's läutet) までが、『ハイジの修業と遍歴の時代』(Heidis Lehr- und Wanderjahre) として執筆され出版されたこと、つまり、これだけで完結した独立の作品であったことを知る人は意外に少ないのではないか。そして第15章「旅行の用意」(Reisezurüstungen) 以下の第2部、『ハイジは習ったことを役立てることができる』(Heidi kann brauchen, was es gelernt hat) は、実は続編としてあとから書かれたものであって、初めからいまのような形で構想されたのではない。その間の事情について、子安美知子は次のように述べている。

「この物語が各国語に翻訳されると、たちまち著者スピリのもとには、ドイツ語圏のみならず、遠くアメリカからも、子どもたちの手紙が殺到し、その後のハイジはどうなったのか、ぜひ続きを聞かせてほしいという強い願いが寄せられた。それで著者は第二部『ハイジは習ったことを役に立てる』を書いたのであるが、ここでは、フランクフルトからクララとおばあさまがハイジを訪ねてきたときのことが中心になっている。しかし、この第二部のすじは省略したい。第一部だけで、著者スピリの意図はじゅうぶんうかがうことができるし、またその意味で完全な作品といえるからである。」<sup>1)</sup>

この子安の所論の最後の部分が果たして当を得ているかどうかについては、あとで検討を加えることにしたいが、それはともかく、初めはシュペーリに、第2部に当たる部分を書くつもりがなかったことは確かである。高橋健二も「注目すべきことは、シュペーリは『ハイジ』の続編(第2部のことを指す一筆者注)を本来は書く気がなかったということです。第1部『ハイジの修業時代と遍歴時代』で、ハイジが大都会フランクフルトでノイローゼになり、デルフリ村にもどって来て、元気を取りもどし、アルムじいさんも彼女によってなごやかな気持ちになり、教会へ行くようになるところで完結している、と作者は考えていたのです。しかし、熱心な読者や出版社の切望にほだされて続編『ハイジは習ったことを使うことができる』を書きました。そのために、後に自分の息子のベルンハルト・ディートヘルムから、〈ハイジの第2部は書くべきではなかった〉と批評されました。」<sup>2)</sup>と書いているが、このことは、彼女のつけた題名からだけでも推察することができる。つまり、「ハイジの修業と遍歴の時代」と「ハイジは習ったことを役立てることができる」とでは、いかにも釣合いがとれないのである。前者は

むしろ、ゲーテの代表的な2大長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』をただちに想起させる。ところが、シュペーリはゲーテに倣って教養小説を書くつもりで、修業と遍歴の2つの時代を1つにまとめてしまったのだから、そのあとは、もはやないのである。そこで考え出された第2部の題名は、およそ教養小説らしくないものとなった。しかし、だからといってシュペーリらしくないとはいえない。彼女の小説にはなお、“Was soll denn aus ihr werden?” (1886)、その続編の“Was aus ihr geworden ist” (1889)、あるいはまた“Keines zu klein Helfer zu sein” (1890) というようなものがある。これらと比較すれば、むしろ“Heidis Lehr- und Wanderjahre” という題名のつけの方が特殊なのではないか。

とすれば、彼女の書こうとしていた教養小説なるものは、いったいどういうものなのか。恒川隆男によれば、「主人公が幼年期の幸福な眠りからしだいしだいに自我に目覚め、友情や恋愛を経験し、社会の現実と闘って傷つきながら自己形成をしていく過程を描いた長編小説」<sup>3)</sup>であり、『ドイツ文学辞典』<sup>4)</sup>の記述によれば、「一人の人間が、彼を取りまく人間的、文化的環境との相剋のうちに、すなわち自我(Ich)と世界(Welt)との不断の折衝のうちに自己を発見し、内面的形成を遂げるにいたる過程を描く小説形式」である。

そうであれば、『ハイジ』のどこが教養小説なのだろうか。題名から考えれば、少なくとも第1部では、シュペーリは教養小説を目指していたはずである。それなら、どこまでが修業時代で、どこからが遍歴時代なのか。ハイジの生活は、山の牧場とフランクフルトのゼーゼマン(Sesemann)家、そして再びアルム(Alm)のおじいさんのもとと、時間的には3つ、空間的には2つに分かれる。とすると、時間的な順序に従って、最初のアルムでの生活を修業時代、アルムへの帰還を含めてフランクフルトでの生活を遍歴時代とするほかはなさそうに思われる。遍歴という言葉は、遠いドイツの都会フランクフルトまで行くのだから、この小説にふさわしくないとはいえない。だが、ハイジの生活が果たして、「教養小説」に描かれるべき生活であったかどうか。主人公が「それぞれの時代と社会から、どんなものを与えられ、摂取したのか、つまりそれぞれの世代の教養資材としての社会環境ということが、真の意味における教養小説にとってつねに重大な要件をなす。」<sup>5)</sup>と菊池栄一は言い、この問題について子安は次のように述べる。シュペーリが『ハイジ』を書くときには、……子どもの世界での教養小説を書こうという意図があったにちがいない。このことは、題名からばかりでなく、作品の内容からもじゅうぶん証明される。すなわち、ハイジという一人のおさない女の子は、アルプスの自然、気むずかしい祖父、都会の文明、そこに住む人びと、などとのまじわりによって、それらのなかでのひとつひとつの経験をつうじて、子どもなりにもつねにその内面で心の対話をおこないつつ、精神的発展をとげていくのである。<sup>6)</sup> 子安は修業時代と遍歴時代とを分けず、第1部全体を修業時代と遍歴時代の総合体と考えているのだが、その当否は別として、「子どもなりにもつねにその内面で心の対話をおこないつつ、精神的発展をとげていくのである」と書いている。教養小説とするためには、こう考えなければならないであろうし、さらに、「か

なりはっきりした意図をもって子どもの世界に教養小説がもたらされた」, 「作品『ハイジ』が子ども版の教養小説であるということ」などの言葉で分かるように, 子安は『ハイジ』が教養小説であることを疑っていない。しかし, アルムでの生活はハイジにとって楽しいばかりで, 彼女がここで何らかの修業をしたとは思えないし, フランクフルトに行ってから, 一転して, 窮屈な市民道徳の締めつけに窒息しそうになり, ホームシックに苦しむことになる。その苦しみが, 果たして彼女の内的な成長・発展に寄与したであろうか。どうも, そのようには思えない。夢遊病になっただけではないのか。ハイジがフランクフルトで学んだのは, いずれも, ゼーゼマン氏の母親であるおばあさまの力による, 読み書きとキリスト教信仰であった。たった8歳なのだから, 真の意味の自我の目覚めや自己形成などは望むべくもない。きちょうめんではあるが融通のきかない家庭教師によってはどうしても覚えられなかったアルファベットの, おばあさまの手助けで覚えることができ, 苦しい心を神様に打ち明けることができるようになったのが, ハイジの成長ということになる。

宮下啓三は「ロッテンマイア女史の理想」<sup>7)</sup>という文章の中で, ハイジは「女性としてのたしなみをロッテンマイア女史から学ぶことになる。スイス娘に対する期待を裏切られた女史は, 野蛮人同然のハイジに教育をほどこさなければいけないと考える。……シュペーリがロッテンマイアの考え方を全部否定しているなどと思うのは誤りだ」と書いている。果たしてそうだろうか。快活な自然児ハイジは「野蛮人同然」というような否定的な描き方をされているのではないし, そういうハイジがロッテンマイヤー女史 (Fräulein Rottenmeier) から「女性としてのたしなみを学ぶ」とは! この「女性としてのたしなみ」とは, ハイジに押しつけられる, 体裁を重んじる伝統的な市民道徳ではないか。これがハイジに与えられる教養と, 宮下は言いたげである。しかし, 前記のような教養小説の定義を児童文学にそのまま適用できるわけにはむろんいかにせよ, 宮下のこういう考え方には疑問が残る。この疑問を, シュペーリの他の作品について検証してみたい。ロッテンマイヤー女史と同種の人物は『コルネリの教育』(Kornelli wird erzogen, 1890)にも登場する。その女性ドルナー (Fräulein Dorner) は, ロッテンマイヤー女史の写し, それも, より悪い写しで, 彼女のような考え方をする人間を作者が肯定しているとは考えられない。少なくとも, 作品からそういう読み取り方はできないのである。やさしい放任主義のコルネリの父親は, 母親のいない家庭に育ったコルネリに充分に行き届いたしつけをしてやれなかったことが気になっていて, たまたま仕事で夏の間ずっと留守にする機会があったので, 従姉妹のドルナーとグリデーレン (Fräulein Grideelen) に頼んで, よいしつけをしにきてもらうことにする。この女性がロッテンマイヤーと同じように, 厳しい市民道徳を押しつけてコルネリの子どものらしい遊びをすっかり封じてしまう。コルネリが無邪気な明るさを失っていじけてしまうのは, ドルナーの教育のせいなのである。ロッテンマイヤー女史の似姿は, このドルナーだけではない。『彼女はいったいどうなるの?』(Was soll denn aus ihr werden?)の続編『彼女は怎么样了のか』(Was aus ihr geworden ist)に登場するスメーレ女史 (Fräulein Smele) は, 主婦のいない教授の家庭をロッテンマ

イヤー女史のように支配している。ただ、ハイジのような子がいないだけに、その活躍ぶりは制限され、わずか2回ほど姿を見せるだけであるが、彼女のやり方をこぼす教授の男の子たちの話と、それを裏付ける、偏頭痛持ちの彼女の冷やかな態度は、ロッテンマイヤー女史にそっくりである。このタイプはシュペーリが好んで登場させるところで、決して、わずかでも肯定的に描かれてはいないことに注意すべきである。

教養小説の問題に戻ると、以上述べたように、作者の意図がどうであれ、『ハイジ』を教養小説と見ることにはいささかの無理がある。そのことは、主人公とその生活を一見しただけで明らかになる。5歳になるかならないかの幼い少女が、頑固なおじいさんとたった2人でアルプスの牧場に暮らしたあと、8歳のときにフランクフルトに連れて行かれ、病気になって、1年もたたないうちに山に帰ってくるのである。もっとも、『ハイジ』を読んだ人は誰も、それを教養小説だなどと思って読んではいないだろう。だが、作者はキリスト教信仰に、ハイジの「自我」を目覚めさせ「内面的形成を遂げ」させて、ついには「アルムおじ」(Alm-Öhi)のいわば社会復帰に、そしてクララの治癒に導く役割を割り振る。しかし第1部で実現するのは、キリスト教に背き、共同体に背を向けるおじいさんの社会復帰だけで、幼い読者により多くの感動を与えるクララの治癒は、第2部に委ねられるのである。子安は、すでに引用したように、第2部では「フランクフルトからクララとおばあさまがハイジを訪ねてきたときのこと」が中心となり、「第一部だけで、著者スピリの意図はじゅうぶんうかがうことができるし、またその意味で完全な作品といえる」と書いているが、それはこの意味で疑問視される。大体、第2部のこの要約には前記の重要な第2のモメント、すなわちクララの治癒が欠けているのだが、そのことは別として、それを引き出していない第1部だけでは、作者に初めは第2部を書く意図がなかったにせよ、やはり完全な作品とは言い難いであろう。読者にしても、おそらく第1部だけでは物足りなさを感じたに違いない。続きを知りたいという手紙が殺到したのは、むしろ当然とっていい。高橋健二も、さきに引用した文章のあとにすぐつづけて、「でも、読者としてみれば、第1部だけではものたりなく感じます。」<sup>9)</sup>と書き、『シュペーリの生涯』<sup>10)</sup>には、「できあがってみれば、両長編(『ハイジ』と『グリトリの子どもたち』)の第二部とも、楽しく読まれる物語になっている。子どもの読者としてみれば、それぞれ第一部だけでは物足りなく感じるとしても、無理からぬところがある。第一部だけの方がすっきりしているが、作者が妥協したことは、必ずしもわるくはなかったといえよう。」と述べている。

ただ、作者がおじいさんの社会復帰をおそらく重要視して、これで『ハイジの修業と遍歴の時代』の幕を引こうと考えていたことはたしかのように思われる。比較のために、長編『ヴィルデンシュタイン城』(1892)の結末を見ることにしたい。城に帰ってきたブルーノ男爵が若かった時を顧みて語る言葉は、村に下りてきたアルムおじさんを思い出させるからである。そしてこの長編はこれで完結して、続編が書かれることはなかった。

「私は深く恥じています。私は神と人間に対して、怒りと恨みの心を抱いてここにやってきました。そして、私の惨めな生涯を終えるのが早ければ早いほどいいと思いました。私はここ



で、みんなから見捨てられ、あるいは嫌われていると考えていたのに、親切が、愛が、比べようもない真心が、私を迎えてくれました。私はこれまでに、それに値するようなことは何一つしていません。どうやって感謝の意を表すことができますでしょうか？ 犯した罪は、もう償うことができません。』<sup>10)</sup>

子安のほかに、「スイス メルヘン紀行」を副題とする写真集『アルプスの少女ハイジ』<sup>11)</sup>も、表紙に〈Heidis Lehr- und Wanderjahre〉と記す通り、第1部の抄訳しか載せておらず、また息子ベルンハルトも、第2部は書くべきではなかったと批判しているとはいえ、それを反証し、第2部の重要さを示すものとして、荒井冽著『名作に学ぶ生き方〈西洋編〉』<sup>12)</sup>を挙げておきたい。ここには名作の1つとして『ハイジ』が紹介されているのだが、そこに引用されるのは、第1部ではなく、第2部でクララがアルムにきてからのことである。そしてその重点は、「ペーターのやきもちがきっかけとなって、クララが歩くことができるようになるという、この物語の最後のクライマックス」である、とされている。『ハイジ』全編の魅力がどこにあるのかを示す1つの例証とっていいのではないだろうか。

## 【注】

- 1) 「スイスの児童文学」, 波多野完治・島田謹二監修 『世界の児童文学』  
(1967年 国土社) S.297.
- 2) 高橋健二・矢川澄子 『アルプスの少女ハイジ, スイス メルヘン紀行』  
(1992年 求龍堂) S.108.
- 3) 『平凡社 大百科事典 第4巻』(1984年 平凡社) S.376.
- 4) 日本独文学会編 『ドイツ文学辞典』(1956年 河出書房) S.180.
- 5) 国松孝二・高橋義孝編 『現代世界文学講座4 ドイツ編』(1956年 講談社) S.139.
- 6) 前掲1) S.298.
- 7) 「ロッテンマイア女史の理想」, NHK 取材班 『アルプスの少女ハイジ・夢紀行』  
(1990年 日本放送出版協会) S.54.
- 8) 前掲2) S.108.
- 9) 高橋健二 『シュペーリの生涯』(1972年 彌生書房) S.108.
- 10) Johanna Spyri: Schloß Wildenstein, Reutlingen o. J. S.216.
- 11) 前掲2)
- 12) 1990年 あすなろ書房 S.28-33.

## 3. 自然と人工, あるいは田園と都会の問題

シュペーリの小説の書き出しは必ずアルプスのふもとの村の描写から始まり、そこを舞台として話が展開する。そしてその風景描写が彼女の作品の魅力の1つであり、多くの賛美の対象

となる。たとえば児童文学評論家ケスター（1827-1957）は『ドイツ児童文学史』の中で次のように言っている。

「ヨハンナ・シュピーリは疑いもなく、詩的な才能に恵まれている。このことはまず第1に、彼女の風景描写に示される。その描写は、とりわけ故郷のスイスを描くときに、具象性とムードに満ち溢れるのである。」<sup>1)</sup>

しかしその一方に、彼女が都会をアルプスの対極に立つ悪と規定し、アルプスの自然を、より美しく際立たせようとしている、という批判もある。それではいったい、シュピーリの扱う自然は都会とどのように対照的に描かれているのかを探ってみたい。

高橋健二は「シュピーリの物語では、美しい自然そのものの魅力とともに、人工的な教育より以上に人間の心身におよぼす自然の健康な働きは、大きな役割を占めている。『自然に帰れ』というルソーの叫びにこだまするかのように、シュピーリは山の自然な生活の健康な美しさを飽かず書いた。都会はしばしば、人の心身をゆがめ、むしばむのに反し、母なる自然は本来の人間を育てる。自分は全く大地の子で、栄養を大地から引き出す、と彼女は言っている。自然への帰依は神への帰依である。彼女の自然感情は神への思いに通じている。」<sup>2)</sup>と書いているが、『ハイジ』の中では実際どのように自然が描写されているだろうか。

「愉快的アルムの山登りが始まった。夜のうちに、風で雲がすっかり吹き払われ、紺碧の空が四方八方から見おろしている。その真ん中に太陽が輝いて、緑のアルム山を照らしていた。青や黄色の花はうてなを開いて、うれしそうに太陽を見返している。

ハイジは、あちらにとび、こちらにはねして、うれしさのあまり歓声をあげた。きれいな赤いサクラソウが、群れをなして咲いているかと思えば、美しいリンドウで真っ青に見えるところもある。そこいらじゅうに、葉のやわらかな金色のハンニチバナが、日に照らされて、笑いながらうなずいていた。」<sup>3)</sup>

「こうして、知らないうちに1日が過ぎ、太陽はもう、ずっと向こうの山のうしろに沈もうとしていた。ハイジはまた地面に座り込んで、青いツリガネソウと金色の夕日を浴びて輝くハンニチバナをじっと眺めていた。どの草も夕日で金色に染まり、上にそびえる岩は、きらきらと光り始めた。

ハイジはいきなりとびあがって、叫んだ。

『ペーター、ペーター。燃えている、燃えているわ。お山がみんな燃えているわ。遠くの雪も、空も、燃えている。あの高い岩山が、きらきら光っているわ。雪は火みたいできれいねえ。ペーター、起きなさいよ。ほら、鳥のいるところも火が燃えているようよ。まあ、岩を見てごらんなさい。モミの木を見てごらんなさい。みんな、みんな、火に包まれているわ。』<sup>4)</sup>

このようにアルプスの自然描写は量も多く、かつ具体的で詳細であるが、都会は、狭い階段だとか、高い塔だとか抽象的に表現されるにとどまる。ハイジはフランクフルトに着いた翌日に、馬車の音をモミの木のざわめく音と間違え、戸外に飛び出すが、街の様子は何も描かれていない。そのあとセバスチャンに頼んで窓を開けてもらい、外を眺めるが、「石の道が見える

だけ]<sup>9)</sup>である。ただハイジの部屋は幾分具体的に「自分は高くして白いベッドに座っていて、目の前には、大きな広い部屋が見え、光の入ってくるころには、長い長い白いカーテンが下がっている。そのそばに大きな花の模様がついた安楽椅子が2つあり、壁ぎわには、同じような花模様のソファ、その前にまるいテーブルが置いてある。隅には洗面台があつて、ハイジがまだ見たこともないような道具が、いろいろと載っている。」<sup>10)</sup>と描写される。ハイジはほとんど外に出ず、家の中だけで暮らしているのだから、それも当然と言えるが、アルプスの自然描写と比べれば、問題にならないほど簡単で、類型的な説明に終わっている。

登場人物に目を移してみよう。病気の、もしくは病弱の子どもは、必ず都会の子どもといってよい。例外として挙げられるのは、『グリトリの子どもたち』のエルスリであろう。彼女はアルプスの自然の中で育っているにもかかわらず、病弱で、最後には死んでしまう。しかし『ハイジ』のクララを初め、『コルネリの教育』のディーノ、『ヴィルデンシュタイン城』のレオノーレ、『グリトリの子どもたち』のノラ、『彼女はいったいどうなるのかしら?』のヘレーナ・フォン・アッセン、『ジルバー湖とガルダ湖のほとりで』(Am Silber- und Gardasee, 1878)のシルヴィオはみな、都会の病気か病弱の子どもである。そしてこれらの子どもと、アルプスの自然の中で育った健康で快活な子どもとの間に友情が芽生えるのが常である。この点においても、シュペーリが都会の環境は子どもを育てるのに適していないと考えていることが分かる。シュペーリは1人息子を若くして失っている。彼もまた、チューリヒで生まれ育った都会の子であったが、病弱で、とくに心臓の病気をかかえていた。彼女の小説に登場する病気の子どもは、彼女の息子の面影を写しているのかもしれない。アルプスの自然の中でのびのびと育った健康な彼女は、都会が子どもの健康には適さないことを強く感じていたのだろう。もう1つ付け加えれば、シュペーリ家は裕福な家庭であったはずだ。病気に対しては経済的な豊かさも何の役にも立たないということをシュペーリは自ら体験していた。

さらに作者は、『ハイジ』の中にロッテンマイヤー女史やティネツテのような人間を登場させて、自然児ハイジの魅力を浮き彫りにするとともに、都会の非人間的な社会を否定的に描き出している。ハイジがデーテに連れられて、ゼーゼマン家にやってきた時のことである。デーテは最初に、御者のヨハンにロッテンマイヤー女史に会えるかをどうか尋ねると、彼は「それは私の受持ちじゃありませんよ。」と答え、呼び鈴で召使のセバスチャンを呼ぶように言う。セバスチャンも同様に、今度は小間使のティネツテを呼ぶように言う。ティネツテは階段の上からぶつきらぼうに受け答えをし、しばらくしてからやっと、ロッテンマイヤー女史のところへ案内される。これは、同じ家の奉公人でも役割がきちんと分けられていることの表れだが、この時代、つまり19世紀後半のハイジの時代には、古い身分制は法律上ではくずれているものの、生活習慣は残っており、社会的な身分序列はもちろん、同じ奉公人の間でも序列があつて、呼び名が違い、受持ちの分担がはっきりと決まっていた。ちなみに、その中でもロッテンマイヤー女史のような、子供のしつけ役は一段と身分が高い。その他にも、テーブルマナー、召使の扱い方、ゼーゼマン夫人への挨拶の仕方など、都会の市民(貴族)家庭のしきたりが少し

ずつ分かってくるにつれ、これまでとはまったくの別世界に入ってしまった思いをするハイジのとまどいは、よく理解できる。

しかしシュペーリは、教育に関しては都会を否定していない。むしろ才能を伸ばすためには都会の教育が必要と考えているようだ。『コルネリの教育』のコルネリは学校へ入るために町へ行くし、またディーノが町に住んでいるのも、教育のためである。母親は後見人の紳士に「たしかに田舎の空気の方が、子供たちにとってよかったです。しかし、そのいい空気をいちばん必要としております長男が、学校のために町に移らなくてはならなかったのです。」<sup>7)</sup>とやっているし、小説の最後では、夏はイラーバッハで過ごし、冬の間は町で教育を受けることになっている。『ヴィルデンシュタイン城』のサロ少年とマクサ夫人の長男ブルーノもまた、都会の学校で学ぶことになり、『グリトリの子どもたち』のファニーは、画家になるために、デュッセルドルフへ勉強に行く。『レーザ家のひとり』(Einer von Hause Lesa, 1894)のヴィンチ少年もフライブルクで音楽の教育を受けた。『明るいヘリプリ』(Vom fröhlichen Heribli, 1889)のヘリプリも音楽教育をライプチヒで受けて、立派な音楽家になって故郷に戻ってくる。『ハイジ』にはそういうところは見られない。ハイジはフランクフルトでお祈りや神を信頼する心を学ぶだけではなく、字も覚えるが、もちろん才能を伸ばすまでには至らない。ここでは都会の教育が絶対に必要ではない。字を覚えることなら、デルフリ村の学校で十分だったはずだ。しかしおじいさんは牧師の勧めにもかかわらず、ハイジを学校へ行かせることはしなかった。それゆえハイジに字を覚えさせるのは、おじいさんと離れたところの方が無理がない。それに、ハイジがフランクフルトから帰ったあとであるからこそ、ペーターのおばあさんに賛美歌を読んであげたり、おじいさんに放蕩息子の話を読んで聞かせる価値が出てくるのである。『ハイジ』に関していえば、特に都会の教育を肯定しているようには見えないが、他の作品には、彼女の考えがこのようにはっきりと表れている。

『ハイジ』の中ではなお、都会とアルプスを対比する場面として次のような箇所が特徴的である。

アルムでハイジがおじいさんに「どうして鷹はあんな鳴き声をするの？ どうしていつも、ああやって、空からあたしたちの方へ叫んでいるの？」と尋ねると、おじいさんは「鷹はね、下に住んでいる人間をあざけているのだ。人間どもが村にごちゃごちゃと固まって住んで、お互いにいじわるをし合っているのを見てな、こう言っているのだよ。『きみたちもそんなに固まっていないで、1人1人が自分で生きるようにし、私のように高いところに昇って行けば、きっと、今よりも幸せになれるんだがな。』」<sup>8)</sup>と答えている。これはおじいさんが自分自身の考えを鷹を託して述べているのだが、ハイジはフランクフルトでそれを思い出してこう言っている。

「……鷹がフランクフルトの空を飛んだら、きっと、もっとずっと大きな声で鳴いて、こんなにたくさん人間が、ごちゃごちゃ固まって、いじわるし合っていてもしょうがない、なぜ気持ちのいい岩の上に行かないんだらうって言うでしょう。」<sup>9)</sup>そしてフランクフルトからア

ルムの山へ帰ってきた日には、ミルクを飲みながら、「世界じゅうどこをさがしたって、うちのミルクみたいにおいしいものはないわ、おじいさん。」<sup>10)</sup>と、またフランクフルトから医者が訪ねてきたときには「ここで悲しい心になる人なんかいないわ。そんなこと、フランクフルトだけのことよ。」<sup>11)</sup>と言っている。

しかし他の作品では、都会と田園がこれほど対照的に描かれてはいない。町の名前も具体的ではない。コルネリは、イラーバッハで鬱病になり、町で回復する。自然の中でも悪い影響は起こるし、都会でも病気の回復はあり得る。アルプスに育っても、ハイジのような健康で素直な快活な子ばかりではない。いじわるな子、ずるがしこい子、しつけの悪い子、そして病気で死んでいく子もいる。ただ、シュペーリが強く否定したかったのは、ロッテンマイヤー女史やドルナー嬢のように、古いしきたりや形骸化した市民道徳を重んじる教育であろう。社会に生きる人間として守るべき道徳ではない。『山羊飼いモニ』に出てくる、非道徳的な考え方をするイエルクにも、『グリトリの子どもたち』の、いたずらが過ぎた子どもたちにも、それなりの罰が加えられる。『ひとかどの人間になるティスの話』(Vom This, der doch etwas wird, 1886)のティス、『ヴィルトハウゼンで起こること』(Wie es in Wildhausen zugeht, 1880)のカーティは、あまりほめられない生活を送っていたが、心の暖かい人に出会って生まれ変わる。また、ロッテンマイヤー女史やドルナー嬢とは正反対の人だっている。『ヒンターヴァルトで』(Im Hinterwald, 1889)のフランシスカ先生がそれで、彼女は、村の嫌われ者だったみなし子のヒェルという少年の才能を見抜き、個性を引き出し、自らの手で身なりを整え、礼儀正しい立派な子どもに変身させる。彼女は子どもの気持ちを理解できる、真の愛情を持つ人だった。ゼーゼマン夫人がハイジに字を覚えさせることに成功したのも、ハルム夫人がコルネリの鬱病を治せたのも、暖かい、思いやりのある態度で子どもに接したからではないか。ここではもう、問題は都会と田園ということではなくなっている。『ハイジ』を見る限りでは、たしかにシュペーリは都会を「悪」とみなしているかもしれない。しかし、都会がみにくければみにくいほど、アルプスの自然が輝き、ハイジの故郷への思いが、より強いものになる。そしてハイジが文明化された社会になじめない、アルプスの大自然の中で育った自然児だからこそ、読者の心を惹きつけてやまないのも事実であろう。『ハイジ』の根底にあるのは、自然への帰着である。宮下啓三は、「山の魔力」という文章の中で「アルプスの山地に住んだ人間は、下界におりると、どんなに物質的にゆたかな生活をして、ホームシックにかかって、故郷に戻るとそれがなおる、と古くからいわれてきた。」<sup>12)</sup>と書いているが、間違いなく、ハイジもその1人である。

大都会とアルプスの自然との対比の問題に関連して、『ハイジ』で重要な役割を演じる町フランクフルトについて、なお少し考えてみたい。

ハイジがアルムの小屋に住むおじいさんのところから、車椅子の上で暮らす少女のお相手として連れて行かれる先の都会に、なぜフランクフルトが選ばれたのだろうか？

そこはまず、アルプスの牧場とは対蹠的な都会でなければならない。しかも、あまりに遠く

離れていては困る。ハイジが行ったり帰ったりするのにそれほど長い時間がかからない方が望ましいからである。たとえば、ゼーゼマン夫人が住むホルシュタイン (Holstein) などでは都合が悪い。この地名は、本文中ただ1箇所にはしか現れないのだが、ホルシュタインからフランクフルトまでは700キロもあり、その当時の交通事情では大変な長時間を要したであろう。そうたびたびは出てこられないように、わざと遠いところに彼女の住まいを設定したのではないかと思われる。しかもそこは、フランクフルトから見て、スイスとは逆方向にある土地である。そうしておいた方が、すべてに都合がよいのだ。

ハイジの行く大都会はドイツ語圏でなければならない、という制約もある。もちろん、初めからハイジの言葉が通じ、ハイジが相手の言葉を理解することがどうしても必要だからである。では、どうしてスイスの都会ではいけないのか？ スイスにだって大都会があるではないか。現代の統計ではあるが、チューリヒの人口は、60数万のフランクフルトの約2倍で、首都ベルンはほぼ1倍半である。しかし、ベルン、特にチューリヒでは近過ぎるのである。フランクフルトからチューリヒを経てマイエンフェルト (Maienfeld) までは548キロもあるのに、チューリヒからマイエンフェルトまでは187キロしかない。相当程度離れていなければ、別世界にきたという感じにならないし、スイスの都会では自然に近過ぎる。フランクフルトのように、高い塔に登らなくても山が見えるのだ。どちらの意味においても、ホームシックを起こしにくいことはたしかである。それに、都会と田園、人工と自然の対照以外に、スイスとドイツとの違いが、いくつもの興味深い場面を生み出しているのである。たとえばロッテンマイヤー女史は、ハイジをクララの遊び相手として選んだ理由を、ゼーゼマン氏に向かって次のように述べる。「スイスの女の子は、清らかな山の空気の中に生まれて、いわば地面に触れずに育って行くというようなことを、もう何度も本で読んだものですから、そういう子をお邸に入れたいと考えたのでございます。」<sup>13)</sup>

そしてゼーゼマン氏に、「そうはいってもスイスの子どもだって、歩こうとすれば地面に触れるでしょう。そうでなかったら、足の代わりに翼が生えていなくてはならないでしょうからね」とまぜっかえされても、なおも大真面目に話しつつける。「私の申しますのは、よく知られていますように、高い清らかな山地に生きて、理想的ないぶき (ein idealer Hauch) のように、私たちのそばを吹き抜けて行く子どもたちの1人という意味なのでございます。」今なお、こういう考え方の幾分かは残っているような気がするくらいだから、この言葉は当時の代表的な意見だったのではないかと思われる。

スイスではなく、フランクフルトが選ばれた理由には、なお、スイスの都会には、金融業の中心地フランクフルトの豪商ゼーゼマン氏の家のような、ドーデラー<sup>14)</sup>によればデカダンの印象を与える家庭 (die dekadent anmutende Familie) は見出しにくいこともあったであろう。坂井栄八郎は「19世紀のフランクフルト」という文章の中で、「フランクフルトの定期市は中世以来国際的に有名で、北はイギリス、西はフランス、南はイタリア、東はポーランドやハンガリーの物産がここで取り引きされていたのだった。また金融業も盛んで、ここはヨーロ

ツッパで指折りの銀行や金融取引きの町だったのである。世界的な金融業者として有名なロスチャイルド家も、もとはフランクフルトの両替業者である。クララのお父さんも、よく外国に旅行する大商人ということになっているが、そういう商人は、フランクフルトではめずらしくなかったはずである。』<sup>15)</sup>と述べている。

こういう風に、いろいろな意味で、フランクフルトがアルプスの対極として選び出されたのだと思うが、果たして作者のシュペーリはフランクフルトの町をよく知っていたかどうかという疑問が残る。彼女は再三の求めにもかかわらず自伝を執筆していないし、またゲーテのような文豪でもないから、詳しい年譜が刊行されているわけではない。フランクフルトに長く滞在していたことがあるのかどうか、そのあたりははっきり分からないのだが、この小説を読む限りでは、詳しく知っていた形跡が見当たらない。その点について、少し検証を試みてみたい。

山を下りたハイジと叔母のデーテはデルフリ村を通り抜けたかと思うと、いきなりフランクフルトのゼーゼマン家の邸に馬車を乗りつける。その途中は完全に省略されてしまうのである。邸に入ったハイジは、翌朝、窓を開けて外を見たいと思う。戸外にはざわざわと風に鳴る樅の木があり、遠くに山々が見えると思うのである。自分では、高く重い窓を開けることはできず、召使のセバスチャンに頼んで、やっと窓を開けてもらったが、見えるものは「石の道」ばかりだった。「遠く、谷全体を見下ろすには、どこに行ったらいいの?」<sup>16)</sup>という問いに、セバスチャンは、「それには、高い塔にのぼらなくてはなりませんね。あそこに、金の球のついた教会の塔が見えるでしょう? あれに昇れば、ずっと遠くの方まで見渡せますよ。」そう聞くと、ハイジはすぐに外に駆け出し、手回しオルガン弾きの少年をつかまえて尋ねる。「てっぺんに金の球のついた教会はどこにあるの?」少年は知らないが、「高い塔のある教会をほかに知らない?」と尋ねられて、「1つ知っている」と答え、ハイジを案内する。大分歩いてから、「突然、高い塔のある古い教会の前に出た。」堂守がいて、ハイジを上まで連れて行ってくれるが、見えるのは「屋根と塔と煙突の海」(ein Meer von Dächern, Türmen und Schornsteinen) だった。

この教会はどこだったのか? 坂井栄八郎は前記の文章の中で、「ところでハイジが塔にのぼったという教会はどれなのか。球状の飾りのついた塔といえば、これも市庁舎からほど遠からぬ所にある衛兵本部のそばのカタリーナ教会が、当時の石版画で見ても、一見して物見やぐら風の高い塔と球状の飾りをつけて、いかにもそれらしくも思われるけれど、そもそも特定の教会をモデルにした話なのかどうか、今となっては誰にもわからない。」<sup>17)</sup>と書いている。しかし、この石版画にある教会の塔の飾りは、もちろんはっきりとはしないのだが、どうも金の球のように見えない。その他の著名なフランクフルトの教会、「ドーム」もパウロ教会も、写真で見る限りではあるが、それらしく思えないのである。だいたい、シュペーリの書き方がひどく漠然としていて、特定の建物を描写したものとは思いがたい。われわれが一般に思い描く、ありきたりの「教会」の姿を1歩も出ていないのである。階段を昇るときの叙述にしてもそうである。「ハイジは塔の番人に手を引かれて、長い長い階段を昇って行った。昇るにつれ

て、階段はますます狭くなり、最後に1つおそろしく狭い階段を昇ったかと思うと、てっぺんに出た。』<sup>18)</sup> 教会の入り口についてはほとんど何も書かれていない。金の球の飾りはどこへ行ってしまったのか？ ハイジの昇ったのはそういう金の球の飾りのついた塔であったのか、なかったのか？ セバスチャンはすぐに、金の球の飾りのついた教会の塔を口に出し、塔の番人はセバスチャンのことをよく知っていたというのだから、どうやら、ハイジの昇った塔がそれらしいのだが、案内した少年はそんな教会は知らないと言うし、その飾りのことはもうまったく触れられることがない。そんなことから、これはある特定の教会を指しているのではないことが推測される。

それはともかくとして、塔の上に昇ったハイジの見たものは、「屋根と塔と煙突の海」であったという。しかし、フランクフルトにはメイン川が流れている。今から百年も前のことである。高い塔の上からなら、たとえ少しではあっても、緑地と川が見えないはずはない。アニメの「ハイジ」が、馬車で郊外に遠足に出かけるエピソードを創作して付け加えているのは、そのあたりの不自然さを補おうとしたのでもあろうか。

フランクフルトの街の描写は、教会へ行ったときのほかにもう1箇所ある。それは、ゼーゼマン氏が帰宅して、ハイジに関するロッテンマイヤー女史の嘆きを聞き、その実相を娘のクララにたしかめようとして、ハイジを水汲みにやる場所である。ハイジは帰ってきて報告する。「最初の泉には人がたくさんいたものだから、遠くまで行かなくちゃならなかったわ。それで通りのずっと向こうまで行ったんだけど、2番目の泉にもたくさん人がいたのよ。だから、別の通りに入って水を汲んだの。』<sup>19)</sup> ローマの泉ほど有名でなくとも、ドイツの町の泉(Brunnen)にも、何かしら彫像がついていてよく知られているものが少なくない。それが、ここには3つも泉が出てきながら、どれ1つとして特定することができないのである。ゼーゼマン邸はハイジの口から、「大きな家で、玄関に太い輪を口にくわえた金色の犬の頭がついている」と説明されているのに。ほかに、フランクフルトといえればかならず名前が出てくる有名な市庁舎レーマー (Römer) も、また、『ハイジ』の手本であったはずの教養小説の作者ゲーテが住んだゲーテハウスも、まったく触れられることがない。シュペーリがゲーテを尊敬あるいは崇拝していたことはたしかなのである。新婚旅行で訪れたところはワイマルだったというし、作品の中にも<sup>20)</sup>ゲーテの詩 "Überallen Gipfeln ist Ruh..." が引かれているくらいなのだ。そもそも、名前のついたフランクフルトの建物は、教会を初めとして1つも出てこない。

そしてハイジがとうとうフランクフルトに別れを告げるときも、「それから、馬車は動き出した。いくらもたたないうちに、ハイジはもう汽車に乗っていた。』<sup>21)</sup>で終わりである。何というあっけなさであろう。帰途にはまだしも、バーゼルで乗り換え、マイエンフェルトで下ることが出てくるから、行きよりはましたが、それにしても実にあっさりした描き方である。作者にとって、そういうことはまったく問題ではなかったのだ。だが、それでも、もしシュペーリがフランクフルトをよく知っていたら、おそらくこんな書き方にはならなかったであろう。フランクフルトは、いろんな意味でこの小説に適当な町だったから選び出されたのであっ



て、そのためにはかならずしも作者のよく知っている町である必要はなかった。シュペーリがフランクフルトを、少なくとも詳しく知らなかったであろうことはまず間違いない。高橋健二は「贅肉がなくて引きしまったからだつきのシュペーリは六十歳を越えても、まめに旅行をした。数週間執筆を続けると、『大砲のたまのように』とび出すのであった。狭いスイスはすみずみまで知っていた。それによってほとんどスイスのすべての地方がそれぞれの特色をもって描かれているのが、彼女の小説の魅力である。フランスにはついぞ行かなかったが、フランス語地区のジュネーブ湖畔には好んで滞在した。イタリアも、再三小説の舞台にとりあげられているように、彼女を誘った。六十歳のとき旧友アンナ・フリースをジェノヴァの南の海浜に訪れもした。もちろん、ドイツ語地区に生まれ暮らした彼女は、主としてブレーメンやライプチヒなど、ドイツの町を大きな旅の目標に選んだ。作品にも、『ハイジ』におけるフランクフルト、『グリトリ』におけるライン河など、ドイツがしばしば描かれている。』<sup>22)</sup>と書いていて、スイスはよく知っているが、フランスには行ったことがなく、ドイツではブレーメン、ライプチヒが挙げられているが、フランクフルトに行ったとは述べられていない。

それになお1つ付け加えれば、ハイジをフランクフルトに連れてきた叔母のデーテはどこへ行ったのか。フランクフルトの近いところに勤め口があるはずの彼女は、ハイジをゼーゼマン家に送り届けたところ、約束が違うとロッテンマイヤー女史に問い詰められて、こう答える。「今もうお暇しなければなりません。私のご主人がお待ちですから。ご主人のお許しを頂きましたら、また、この子の様子を見にお伺いしたいと存じます。』<sup>23)</sup> こう言ってさっさと逃げてしまうのだが、あとで様子を見にくるどころではない。ハイジを家に帰すことになってゼーゼマン家に呼ばれてきても、なんだかんだと理屈をつけて、当然の義務を果たすことをしない。フランクフルトのどこに、どんな家庭に住み込んでいるのかもまったく分らない。ゼーゼマン邸だってどこにあるのか分からないのだから、それも当たり前ではあるのだが。デーテはハイジをアルムから連れてくる役割（だが、重要な役割のはずである）しか割り振られていないことを考えれば、無視されても仕方がないのかもしれない。それにしてもこの扱いは、作者とフランクフルトとの関係に関する上記のような推察の1つの裏付けにはなる。

(本学講師＝ドイツ語担当)

## 【注】

- 1) Hermann Leopold Köster, Geschichte der deutschen Jugendliteratur,  
Braunschweig 4.Aufl. 1927, S.311.
- 2) 高橋健二 『シュペーリの生涯』(1972年 彌生書房) S.113.
- 3) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.27.
- 4) A.a.O., S.36.
- 5) A.a.O., S.89.
- 6) A.a.O., S.81.
- 7) Johanna Spyri, Kornelli wird erzogen, Reutlingen o. J., S.17.
- 8) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.38.
- 9) A.a.O., S.105.
- 10) A.a.O., S.153.
- 11) A.a.O., S.192.
- 12) NHK 取材班 『アルプスの少女ハイジ・夢紀行』  
(1990年 日本放送出版協会) S.38.
- 13) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.111.
- 14) Klaus Doderer, Johanna Spyris "Heidi"-Fragwürdige Tugendwelt in  
verklärter Wirklichkeit, in <Klassische Kinder- und Jugendbücher>,  
Weinheim und Basel 3.Aufl. 1975, S.123.
- 15) 前掲12) S.50.
- 16) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.89ff.
- 17) 前掲12) S.51.
- 18) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.92.
- 19) A.a.O., S.115.
- 20) Johanna Spyri, Was aus ihr geworden ist, Gotha 1889, S.106.
- 21) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.143.
- 22) 前掲2) S.125.
- 23) Johanna Spyri, Heidi, Düsseldorf 1969, S.75f.

## 参 考 文 献

- Doderer, Klaus : Klassische Kinder- und Jugendbücher  
(Weinheim und Basel 1969)
- Doderer, Klaus : Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur  
(Weinheim und Basel 1975-1982)
- Dyhrenfurth, Irene : Geschichte des deutschen Jugendbuches  
(Zürich und Freiburg i. Br. 1967)
- Hürlimann, Bettina : Europäische Kinderbücher (Zürich 1959)  
(『子どもの本の世界』 野村 滋訳 1969年 福音館書店)
- Köster, Hermann Leopold : Geschichte der deutschen Jugendliteratur (Braunschweig 1927)
- Spyri, Johanna : Gritlis Kinder (München o. J.)
- Spyri, Johanna : Heidi (Düsseldorf 1969)
- Spyri, Johanna : Heidi (Menden o. J.)
- Spyri, Johanna : Heidi (Stuttgart 1987)
- Spyri, Johanna : Schloß Wildenstein (Reutlingen o. J.)
- Spyri, Johanna : Was aus ihr geworden ist (Gotha 1889)
- Wild, Reiner : Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur (Stuttgart 1990)
- ヨハンナ・スピリ作 池田香代子訳 『アルプスの少女』 (1987年 講談社)  
大野 芳枝訳 『アルプスの少女』 (1985年 集英社)  
岡 信子訳 『あるふすのしょうじょ』 (1992年 金の星社)  
関 楠生訳 『アルプスの少女』 (1975年 学習研究社)  
中村 妙子訳 『アルプスの少女ハイジ』 (1991年 講談社)  
平田 昭吾訳 『アルプスの少女ハイジ』 (1991年 永岡書店)  
若林ひとみ訳 『アルプスの少女ハイジ』 (1987年 ポプラ社)  
野上彌生子訳 『アルプスの山の娘』 (1920年 岩波書店)  
武鹿 悦子訳 『ハイジ』 (1993年 チャイルド社)
- ブローガー, フレッド・ブローガー, マーク 堀内静子訳  
『ハイジの青春 アルプスを越えて』 (1990年 ハカカワ書房)
- トリッテン, シャルル作 各務三郎訳 『それからのハイジ』 (1979年 読売新聞社)
- トリッテン, シャルル作 各務三郎訳 『ハイジのこどもたち』 (1980年 読売新聞社)
- 荒井洌 『名作に学ぶ生き方〈西洋編〉』 (1990年 あすなる書房)
- NHK 取材班 『アルプスの少女ハイジ・夢紀行』 (1990年 日本放送出版協会)
- 国松孝二編 『スピリ少年少女文学全集』 (1960-1961年 白水社)

国松孝二・高橋義孝編 『現代世界文学講座4 ドイツ編』 (1956年 講談社)

高橋健二 『シュペーリの生涯』 (1972年 彌生書房)

高橋健二・矢川澄子 『アルプスの少女ハイジ, スイス メルヘン紀行』  
(1992年 求龍堂)

日本独文学会編 『ドイツ文学辞典』 (1956年 河出書房)

波多野完治・島田謹二監修 『世界の児童文学』 (1967年 国土社)

『平凡社 大百科事典 第4巻』 (1984年 平凡社)